

ペナン日本人学校における国語指導と実践

前ペナン日本人学校 教諭

群馬県高崎市立塚沢中学校 教諭 新井 範子

キーワード：ペナン，マレーシア，国語，書写，現地理解

0. はじめに

日本人学校の児童生徒は、日本語で学習している。だが、その環境は日本と大きく異なる。まず、日本語のインプットが少ない。では、言語を含めた現地の文化に通じるようになるかということ、そうではない。子ども達は普段、日本語で会話をしている。そして、インターネットの普及により、日本の友達と定期的に連絡を取り合ったり、日本のウェブサイトを見たりしている。彼らが興味をもっているのは、日本の文化である。だから、現地の文化については意図的に機会を設けない限り、触れずに過ごしてしまうというおそれがある。しかし、日本語に触れる機会が少ないという欠点がありながらも、日本では学べない現地の言葉を学ぶことができるという強みもある。海外で生活しているからこそ言語感覚が磨かれ、日本語の新たな見方が育つチャンスなのではないだろうか。

以上の点から、日本語に触れる機会を少しでも多くすることと、海外の強みを生かした日本語の授業を行うことを目指して指導にあたった。

1. ペナンの言語環境

ペナンは、主に中華系の民族、マレー系の民族、インド系の民族が生活している。そのため、公用語のマレーシア語よりも、英語が多くで場面で聞かれる。よって、ペナン在住の日本人は、主に英語を用いて現地の人々とコミュニケーションを図っている。

日本語については、日本語のテレビや新聞はあるが、店頭で日本語の書籍を購入することは難しい。日本と比べて、日本語の表現に触れる機会が少ない。

2. 日本語に触れる機会を多くするための実践

(1) 図書館教育の充実

児童生徒は、日本語に触れる機会が少ない。それを補う手段として、読書は欠かせない。ペナン日本人学校の図書室は、利用者が少ないという課題を抱えていた。そこで、蔵書を充実させること、図書委員会を中心に読書を推進していくこと、保護者の協力を得て図書室を活性化させることを目指した。

まず、蔵書の充実について述べたい。私の赴任前から検討されていた、バーコードによる蔵書管理システムが本格的に導入された。それに伴い、古い書籍は廃棄し、新しい書籍を購入することにした。また、図書の紛失もきわめて多く、シリーズ本が抜けていることがしばしばであった。これを、解決すべく、当時の図書主任を中心に行った。

小学部高学年から中学部の利用が少なかったため、高学年以上向けの本を多く購入した。すると、読書好きの児童生徒が頻繁に図書室に来るようになり、彼らに薦められた本を読む子どもが増えた。また、漠然と読書に興味はあるけれど、どんな本を借りたらよいかわからない、という児童生徒も図書室を訪れるようになった。

紛失本については、年に一度蔵書管理をすることを試みた。バーコード管理したことで紛失本も減ってきたが、蔵書点検の結果をおたよりにして知らせることで、紛失本を減らせるように努めた。

次に、図書委員会の活動について述べたい。図書委員会は、本の貸し出しと返却の手続きのみ行っていた。だが、新たに図書委員会だよりを発行することと、お薦め本を月ごとに展示することを始めた。お薦め本には、毎

回紹介カードを添えるのだが、そのカードを書くためには、本を読まなければならない。お薦め本を紹介するために、図書委員が本を読むようになる、ということにもつながり、当然図書委員のお薦め本を借りる子どもも増えたことで、図書室の利用者も増えた。

最後に、保護者の協力による図書室の活性化について述べたい。保護者の中には、日本で読み聞かせボランティアや図書ボランティアを経験していた方や、家庭で読み聞かせをたくさんしている方がいた。そこで、父母会を通じて図書ボランティアを募った。集まったボランティアの方々に、読書週間に読み聞かせをしてもらった。低学年を中心に、多くの児童が集まり、中には通りがかった中学生が立ち止まって聞いていく、といった光景も見られた。読書週間の試みが好評であったので、課題点を修正して、毎月1回、昼休みに読み聞かせを行うことになった。

(2) 自主学习ノートによる作文練習

中学部では、自主学习ノートを作り、自分で作った文章を書く、という実践を行った。題材を探すのに苦勞をしていた生徒もいたが、文章を自分で書く習慣がついてくると、授業で作文を行うときに、多くの字数が書けるようになってきた。進め方については課題もあったが、日本語を使う習慣を形成するという意味では、効果はあったと思われる。

3. 海外の強みを生かした日本語の授業の実践

(1) 小学部における書写の授業

小学部5年生の書写、「世界の文字」（光村図書、「書写」小学五年）という単元での実践について紹介したい。本単元のねらいである、「世界の文字にはいろいろな種類があることを知り、文字についての興味をもつ。」を達成するために、多言語が飛び交うパナンの環境は非常に適している。また、海外で生活しているためか、児童は、外国語や他の国のことを扱うことにあまり抵抗がなかった。

本時では、教科書に載っていた、英語、中国語、朝鮮語の例の他に、ドイツ語、ロシア語、ギリシャ語、モンゴル語、アラビア語のあいさつを書いたフラッシュカードを用意した。フラッシュカードをまず見せ、その後発音する。児童は、それをヒントにどの言語の文字かを当てていく。

マレーシアでは、かつてジャウィー文字とって、アラビア文字に字母を加えたものを使用してマレーシア語を表記していたが、アルファベットが使用されるようになってからは、ジャウィー文字を読める人がどんどん減ってきている。ジャウィー文字は、モスクや紙幣などで、まだ使用されている。町中で見かけるジャウィー文字がマレーシア語を表記したものだとは知っている日本人はそう多くないと思われる。よって、この実践により、マレーシア語についての理解が深まった児童もいた。

(2) 中学部における国語の授業

次に、中学部での実践を紹介したい。中学3年の国語、「和語・漢語・外来語」（光村図書、「国語」中学3年）の単元における実践である。

まず、第一時に、漢語・和語・外来語について概要を説明した。そして、宿題として、外来語になった日本語と、マレーシア語における英語起源の外来語をできるだけ探してくることを課した。

第二時では、生徒が宿題で探してきた答えを発表した。そして、外来語になった日本語の共通点を考えた。マレーシア語における英語起源の外来語についても同様に、考えた。すると、最初の間では、「日本固有のもの、食べ物、洋服」といった答えが出てきた。二つ目の間では、なかなか答えが出なかった。そのため、教師が補足説明をした。

マレーシア語において英語起源の外来語が多いのは、かつてイギリスの植民地だったときに、一緒に入ってきたものや仕組みが、マレーシア語に翻訳されることなく、そのまま外来語として定着したという理由が考えられる。

日本人学校の生徒で、マレーシア語を話せる子はほとんどいない。なぜならペナンは英語が広く用いられていて、生徒は主に英語を使って現地の人々とコミュニケーションをとっているからである。だから、マレーシア語を進んで話そうという場面はきわめて少なく、生徒もそのように考えて、マレーシア語の知識は少ない。マレーシアの公用語であるマレーシア語の知識をもつことは、現地理解を進めるうえで、大きな意味をもつだろう。

この実践で、生徒にマレーシア語を見てみよう、読んでみようというきっかけを与えることにつながったのではないかと考える。また、外来語の広がり方や日本語の世界への広がりについても理解が深まったのではないだろうか。

4. おわりに

海外で生活するという事は、新しい言語環境に身を置くことである。自分が普段使用している言語の力を保ちつつ、現地の言葉やコミュニケーションの方法を理解していくことが理想であろう。そうすることで、視野が広がるだけでなく、自分の国の言語文化についても理解が深まるからである。しかしそれは、大変難しいことである。子どもは、新しいことをどんどん吸収することができるが、それは興味があることに限った話である。よって、子ども達が、自分の目の前にある新しい世界に興味をもち、深く知ろうとするように支援するのが教師の役目なのではないだろうか。

今回の派遣では、日本語に触れる機会を多くすることと、海外での強みを生かして、現地理解にもつながり、日本語の理解を深める授業をすることに力を入れた。その際に、教師自身も現地の文化に興味をもっていろいろなことを吸収することと、日本語の良さや特性に気づくことが大切であると学んだ。教師の力が子どもの力になるのだ。